



TITLE:

20世紀前半ドイツ語圏文学における「狂気」のイメージ—シュニッツラー、デーブリン、ツヴァイク—(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

籠, 碧

CITATION:

籠, 碧. 20世紀前半ドイツ語圏文学における「狂気」のイメージ—シュニッツラー、デーブリン、ツヴァイク—. 京都大学, 2020, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2020-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k22186>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	籠 碧
論文題目	20世紀前半ドイツ語圏文学における「狂気」のイメージ ー シュニッツラー、デーブリン、ツヴァイク ー		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文が取り扱うのは、20世紀前半のドイツ語圏文学における「狂気」の表象である。モダニズムと呼ばれるこの時代に、ドイツ語圏文学には、狂気のイメージが氾濫していた。中でも精神疾患をラディカルに称揚し、天才や神として描き出した表現主義の一派がよく知られている。そのラディカルな価値転倒や描写の鮮やかさを理由に、20世紀前半の狂気表象に関する研究は、表現主義の作品に集中しがちである。多くの研究者は、精神疾患をポジティブなものとして描き出す表現主義的表象から、現代にも応用可能な倫理性を引き出そうとしている。これに対して本論文は、表現主義の狂気表象が抱えている問題点を指摘し（第1章）、それを踏まえて表現主義の潮流から外れる作家や作品の狂気表象に注目し、個別に検討を行う（第2、3、4、5章）ものである。</p> <p>狂気というモチーフは、常に文学者の関心を惹いてきたわけではないし、その描き方も、歴史を通して不変のものでは決してない。つまり、狂気の表象はそもそも多様性に富むものなのだ。序章では、モダニズム以前の時代に狂気の表象がどのような変遷を経験してきたのか、その様子を概観する。フーコーが『狂気の歴史』（1961）で言うところの「古典主義」の時代である17世紀以降、ドイツ語圏文学では狂気表象が下火になるが、後期啓蒙以降、特にロマン主義の時代に、狂気は注目を集める。後期啓蒙期には、正常な市民社会と狂気は混交的な状態として描かれていたのに対し、ロマン主義は、当時学問として成立した精神医学の「正常」／「異常」の二分法を追認する形で、狂気を市民社会の対立物として描写した。一方リアリズム文学の時代には、狂気のイメージが表面化しづらくなる。これは、リアリズムの詩学が「正常な状態」だけを文学の対象に見定めたため、さらに当時の精神医学が心因論から身体器質論へ移行したためである。精神疾患が脳病であるなら、精神患者は「完全な他者」としてイメージされることになり、「正常な状態」を描くべき文学は狂気を扱えなくなるのだ。19世紀中葉には、「変質論」が提唱される。変質論はヨーロッパ中を席捲し、精神科医は、素人目には分からない「変質」の兆候を見つけ出し、公衆衛生を維持するという任務を得る。これによって、揺籃期には足元さえ覚束なかった精神医学は、あらゆる分野に対し発言権を獲得する。この状況は芸術の領域にも影響を及ぼし、医学者ロンブローゾやノルダウは、精神医学の知見を用いながら芸術を論じた。これと同時に文学と精神医学は再度接近を果たし、狂気のモチーフが再燃し始める。</p> <p>第1章では、本論文の立場を明らかにするため、先行研究への問題提起を行う。表</p>			

現主義的な狂気表象、つまり唾棄すべき市民社会の対極としての狂気をラディカルに称揚することを、研究者アンツやミュラー＝ザイデルは、フーコーに依拠しながら肯定的に評価してきた。とりわけアンツは、表現主義的な狂気表象の対極にあるものとして、精神疾患者を虐殺したナチス・ドイツのT4作戦を引き合いに出す。精神疾患を蔑視するナチス・ドイツに対して、これを称揚する表現主義は、真っ向から対立しているというのである。つまり先行研究において、表現主義の狂気表象は、美的レベルを越え出て、倫理的なレベルでも高く評価されている。こうした評価を、「文学と医学」の学際研究のあり方が後押ししている。医学と比較対照されたとき、文学には「人間性が宿っている」といった修辞でもって、特権的地位がしばしば与えられるからである。これに対して本章では、医学史家ギルマンの議論や、哲学者デリダ、スピヴァクのフーコー批判を参照しつつ、ヘルツフェルデのエッセイ『精神疾患者たちの倫理』（1914）とアインシュタインの小説『ベビュカン』（1912）の分析を通して、表現主義の狂気表象とナチス・ドイツの精神疾患のイメージの間の類似性を指摘する。つまり両者とも、精神疾患を——称揚にせよ軽蔑にせよ——評価の対象として囲い込む点において、つまり、「正常」と「異常」という精神医学の設定する二分法を追認する点において、共通しているのである。

このことを裏返せば、表現主義的な狂気表象から外れる作品、それゆえに先行研究から保守的とも判断されることのある作品にこそ、精神医学の権力を相対化する契機が潜んでいるという仮説が立てられる。そこで本論文は、「表現主義の潮流から外れる作品を残している」こと、「医学的知識を持っている」ことという二点を基準に検討する作家を選定した。つまりアルトゥル・シュニッツラー（1862-1931）、アルフレート・デーブリーン（1878-1957）、そしてシュテファン・ツヴァイク（1881-1942）の三者である。

第2章では、シュニッツラーの中篇小説『闇への逃走』（1931）を論じる。この作品は従来、主人公のローベルトが「狂気」の中へ「逃走」する物語として読まれてきた。これに対して本章では、先行研究が軽視してきた登場人物ラインバッハの発言——「精神医学は体系へ逃走している」という趣旨——が、作者シュニッツラーの残した書評やアフォリズムの内容と似ていることを出発点に、従来の解釈を転倒することを試みる。主人公ローベルトと優秀な精神科医である兄オットーは、研究者トメーらによって、前者が決定論、後者が自由意志を体現する存在として解釈され、対立する二極と見なされてきた。ここでは後者が常に善としてイメージされるために、自由主義的人間観と逆行する発言を繰り返すラインバッハは無視される。これに対して本章ではまず、兄弟を同類項として、つまり、ショースキーの言う「道徳的 - 科学的伝統」——模範的市民であることと、科学を信奉することに価値を見出す——に忠実な人間として捉え直す。とりわけ、狂気に逃げ込む不真面目な人物とみなされてきたローベルトについて、狂気に至る発端が他にもない「自由意志を喪失することへの恐

怖」であることを根拠に、むしろ市民社会の規範を過剰に尊ぶ人物であり、オットーのパロディ的存在であることを指摘する。このグループに、「体系批判」を展開するラインバッハを対立させることができる。さらに本章では、『闇への逃走』がシンメトリーの構造を持っていることから、作品の真ん中に位置する9章が転換点として捉えられることを指摘する。9章でオットーは主人公に「お前は正気だ」と断言するのだが、これを転機に、加害妄想的状态にあった主人公は、兄からの迫害を確信するという被害妄想的状态に陥る。ローベルトは兄の魔の手から免れようと逃走し、兄が心配して追いかけてくるとこれを殺害して、物語は破局を迎える。だから9章のオットーの正気の保証は、逆説的に、破局への引き金を引く場面として位置付けられる。ということは、物語は決してローベルトの怠惰によってではなく、むしろオットー／ローベルトの「道徳的 - 科学的伝統」的思考ないしは秩序愛によって、カタストロフィを迎えるのである。すると必然的に、二人を相対化する存在であるラインバッハの「体系批判」の思想が重みを持つことになる。ラインバッハという人物は、体系化する精神医学を批判する役割を持つ人物として、相当な重みを持って物語に入り込んでおり、この作品は、精神医学という権力が「体系」へ「逃走」する物語として読まれるのだ。

第3章では、シュニッツラーが医学誌に掲載した文章、つまり医学テキストに即して、その精神医学への態度を炙り出す。シュニッツラーは、ロンブローゾ『天才論』（1890）に寄せた書評（1891）の中で、精神医学の規定する健康と病の境界に疑義を呈する。トメーはこのこととシュニッツラーの自由主義思想を結び付ける。精神医学が恣意的に疾患の範囲を広げることで、個人は自由主義の要である「責任」を放棄し、病の中に「逃走」することが可能になる。そうした怠惰を助長させることを懸念して、シュニッツラーはロンブローゾを批判しているという。この見解が、『闇への逃走』を、ローベルトという不真面目な個人が「狂気」へ「逃走」した物語として捉える解釈に通じる。しかしトメーをはじめとする先行研究には、当の医学テキストの丁寧な読解をなおざりにしているという欠陥がある。本章では、医学テキスト読解を通してトメーの見解に反論する。まずは「サディズム」と「マゾヒズム」という言葉を病名として定着させようとしたクラフト＝エビングの『性的精神病質の領域における新しい研究』（1890）に寄せた書評（1891）を取り上げる。クラフト＝エビングの当該書籍は、疾患の範囲を広げることで「犯罪者」を免罪する、という刑法的な関心に基づいて書かれている。この書評でシュニッツラーは、女性の主体性を無視する論評を行っている点、さらに「マゾヒズム」の創出には様々な難癖をつける一方で、殺人まで含みこんで規定されている加害性の強い「サディズム」という用語の創出はあっさり認めている点において、自由主義思想に明らかに逆行している。この書評一つをとっても、シュニッツラーの精神医学批判を自由主義の擁護と結び付けるトメーの説は成立しない。それではシュニッツラーは、何を意図して精神医学から距離を取る

のか。ロンブローゾ『天才論』に寄せた書評を読み解いてみると、シュニッツラーのロンブローゾ批判は、「やせ型」や「親に似ていないこと」、「愛国心の欠如」といった些細な事柄まで病に分類しようとする態度に集中している。シュニッツラーが批判するのはつまり、「正常性」を仮構することで周縁としての「異常」を産出し続ける精神医学なのだ。シュニッツラーの精神医学批判の核は、自由主義思想擁護から発する個々人の墮落に対する懸念ではなく、むしろ体系批判にある。

第4章では、アルフレート・デーブリーンを主に取り扱う。デーブリーンの博士論文の指導教官だった精神医学者アルフレート・ホッヘは、『生きるに値しない生命を抹殺する行為の解禁』（1920）において、ナチス・ドイツのT4作戦の理論的下地を提供したことで知られる。ホッヘは、近代化の進む変転激しい時代においても健康な人間であれば生き延びる力を持ち、そうした人々こそが社会全体の発展に貢献すると考えていた。デーブリーンは、文学綱領『ベルリン綱領』（1913）において、文学は人間の心理を理解不能のやり方で描くべきと主張している。この主張は、当時主流になっていた記述的精神医学の影響を受けている。この綱領に即して『たんぼぼ殺し』（1910）を読み解く多くの先行研究は、デーブリーンは狂気に至る主人公フィッシャー氏を意図的に突き放して描いていると論じてきた。一方で本章では、作中に、妄想体験の発端となる場面をはじめとして、主人公が「他人から見られることを気にする」というシチュエーションが繰り返し出現していることに注目し、むしろ主人公の心理は読み手の共感を誘うものとして描かれていると論じる。他方で後年の長篇小説『ベルリン・アレクサンダー広場』（1929）においては、理解不可能の健全者が登場する。「理解可能の精神疾患患者」、「理解不可能の健全者」という構図は、一般の期待を大きく裏切る。この図式は、ホッヘの想定する「社会に貢献する健康な人間」というモデルと交差のしようがない。このようなやり方でデーブリーンは、精神医学の権力と一線を画し得ていると言える。

第5章では、シュテファン・ツヴァイクを扱う。ツヴァイクはモダニズムの時代にあってなお、19世紀に流行したスタイルである枠物語の形式を使った作品を多数書き残した。目を引くのが、枠物語の中でも、次の構図を取る作品が複数存在することだ。つまり、「外枠の語り手」である「私」に対して、「枠内の語り手」が、自分自身の体験談——「情熱」にさらわれ市民社会から逸脱した狂気的な経験——を一人称で語るのである。シュトラートマンをはじめとする先行研究は、ツヴァイク作品の枠を、その文学的保守性を示すに過ぎない無意味な「点景物」だとしている。これに対して本章では、ツヴァイク本人が自分の作品に無駄な要素はないと明言していることに注目し、枠には何らかの意義があると仮定する。そこで注目するのが、精神分析の創始者フロイトとの関係である。ツヴァイクはフロイトと頻繁に手紙を交わし、その評伝も書き残している。そして、精神分析に対する当時の通俗的なイメージ、つまり「患者が医師に話をする」という構図は、ツヴァイクの枠物語の構図と似通ってい

る。つまり「患者」と「医師」の関係性と、「枠内の語り手」と「私」の関係性を、並行的に眺めることができるのだ。この並行性を仮定して、評伝や往復書簡をもとに両者を比較してみると、両者は「患者＝枠内の語り手」の「主体性」の取り扱いにおいて、完璧に食い違っていることが分かる。すなわち、フロイトの「患者」は独力で——つまり主体的には——真理に辿り着くことができない一方で、ツヴァイクの「枠内の語り手」はその能力を与えられているのだ。当時、精神分析の理論が結局のところ理解されず、精神分析への大衆のニーズはむしろ、「内省の欲望」に応じて患者の主体性を尊重してくれるという誤解から生まれていたことを考え合わせれば、内省の末自ら真理に辿り着く「枠内の語り手」とひたすら共感を寄せる「私」を導入するツヴァイクの枠は、時代の動向を機敏に察知する作家の嗅覚の産物であるとも言える。さらに、「医師＝私」が徹底的に無力化され、「患者＝枠内の語り手」が自ら真理に辿り着く力を持っているツヴァイク作品の中では、狂気は特殊な事情として囲い込まれることなく、むしろ市井の路上に飛び出している。その作品世界では、誰しものが狂う可能性を持っている。このように狂気の遍在性を示すことで、ツヴァイク作品は、精神医学の二分法をすり抜けていると言える。

以上、三人の作家が三者三様のやり方で精神医学の権力を相対化するやり方を眺めてきた。しかし本論文は、この三人の狂気表象が精神疾患患者と呼ばれる人々を描き出す際の無謬の解であるとは主張しない。それでは表現主義的狂気表象を手放しで褒め称える研究者と同じ轍を踏むことになってしまう。むしろ個別のケースを慎重に検討する本論文が最終的に企図するのは、現実に存在するマイノリティを文学が描き出すとき、もしくは描き出していたときに、文学研究者の立場にある人々が、分かりやすく図式的な特定のイメージを倫理的な「解」として称賛する態度を相対化することである。必要なのは、煩雑ではあっても、個々の作品に可能な限り丁寧な検討を加える終わりのないアプローチだろう。研究者たちがいかに「文学」に特権的地位を与えようとしても、文学は現実を構築する一部に過ぎないのだし、それを評価する研究者もまた現実の権力構造に与しているからである。

(論文審査の結果の要旨)

20世紀前半のドイツ語圏の文学には、「狂気」のイメージがしばしばあらわれる。とりわけ、1910年代に活躍した表現主義の文学者たちは、こうした「狂気」の表象を、唾棄すべき市民社会の対極をなすものとして称揚した。従来の研究においても、こうした表現主義の狂気表象は肯定的に評価されてきた。それに対して論者は、表現主義文学におけるこうした狂気の捉え方は、精神医学が設定する「正常」と「異常」という二分法を追認するものであると主張する。表現主義の文学者たちとはことなり、「狂気」を称揚しなかったために、保守的ともみなされがちな同時代の文学者たちの作品に見られる狂気表象を詳細に分析することによって、そこから、精神医学によって引かれた「正常」と「異常」とのあいだの境界線を相対化しようとする試みを読み取ることが、本論文の目的である。

本論文のすぐれた学問的成果として、次の3点を挙げることができる。

論者は第2章で、医師でもあった作家アルトゥル・シュニッツラー(1862-1931)の晩年の中篇小説『闇への逃走』(1931)を取り上げる。この作品では、狂気におちいることを恐れている主人公ローベルトが、精神科医である兄オットーによって正気を保証されながらも、兄に殺されるという迫害妄想にとりつかれて、最後には兄を殺し、自らも生命を絶つ。従来の研究では、ローベルトが決定論を、オットーが自由意志を体現する存在として対置され、ローベルトは、自由意志を放棄して「狂気」という闇へと逃走すると解釈されてきた。それに対して論者は、これまでの研究では軽視されてきたもう一人の登場人物である医師ラインバッハの存在に着目する。この作品を締めくくる、「精神医学は体系へと逃走している」という趣旨のラインバッハの手記の内容は、シュニッツラー自身の思想とも酷似している。論者によると、ローベルトとオットーは、ともに市民社会の規範を尊重する点において共通しており、「体系」を批判するラインバッハが、この二人に対置される。こうして、これまで、主人公が「狂気」へと逃走する物語として読まれてきたこの作品を、論者は、「体系」へと逃走する精神医学にたいする批判として新たに読みなおす。本章は、論者の文学研究者としてのすぐれた資質をとりわけ鮮やかに示すものであり、論者の解釈は、第3章で、シュニッツラーの医学テキストに即して、さらに補強されている。

第4章では、大学で精神医学を学んだ作家アルフレート・デーブリー(1878-1957)の初期の短篇小説『たんぽぽ殺し』(1910)が論じられる。この作品では、散歩の途中でステッキにからみついたタンポポを薙ぎ倒した人物が、たんぽぽを殺してしまったという罪悪感にさいなまれてゆく過程が描かれる。デーブリーは、『ベルリン綱領』(1913)のなかで、文学は人間の心理を、合理的、分析的に説明すべきではないと主張した。従来の研究は、この綱領と『たんぽぽ殺し』を結びつけ、デーブリーは狂気におちいってゆく主人公を、意図的に突き放して描いていると論じてきた。それに対して論者は、この主人公がむしろ、他人の目を気にする繊細な市民であり、

読者の共感を誘う人物として描かれていると主張する。さらに論者は、のちに書かれた長篇小説『ベルリン・アレクサンダー広場』（1929）のなかで、健常者である主人公の行動が、読者にとって理解不可能なものとして描かれていることを指摘する。こうして、「理解可能な精神疾患患者」と「理解不可能な健常者」という対比によって、デーブリーンは、「正常」と「異常」とのあいだの境界を、内側から突き崩している、というのが論者の結論である。

第5章では、シュテファン・ツヴァイク（1881-1942）が取り上げられる。ツヴァイク自身は医師ではなかったが、精神分析学の創始者ジークムント・フロイト（1856-1939）と頻繁に文通し、その評伝を書き残している。ツヴァイクの小説は、『アモク患者』（1922）、『女の生涯の二十四時間』（1925）、『心の焦燥』（1939）、『チェスの話』（1942）など、その多くが枠構造をとり、外枠の語り手である「私」に対して、枠内の語り手が、情熱にとらわれて市民社会から逸脱し、狂気に瀕した自らの体験を物語る。従来のツヴァイク研究では、彼の小説の枠構造は、前世紀の遺物として否定的に評価されることが多かった。それに対して論者は、ツヴァイクの小説のこうした構造が、患者が医師に自らのことを物語る精神分析の治療法と似通っている点に着目する。だが論者によると、両者のあいだには、大きな差異がある。すなわち、精神分析において、患者は、医師の助けなしには自らの無意識に到達できないのに対して、ツヴァイクの小説では、枠内の語り手は、自らの内面を独力で解明する主体性をもっている。こうして、医師の特権的な地位は、剥奪される。さらにまた、狂気を特殊な現象としてではなく、日常に遍在する事象として描き出すことによって、ツヴァイクは、精神医学の二分法をすり抜けている、というのである。

このようにして、20世紀前半のドイツ語圏文学における狂気表象について、数多くの新たな知見をもたらした本論文は、すぐれた学術的成果として、高く評価することができる。むろん、本論文にも、さらに望まれる点がないわけではない。先行研究を批判し、独自の見解を主張しようとするあまり、論旨の展開がやや性急になっている箇所が見受けられる。また、本論文では、考察対象が3人の作家に絞られているが、他の作家や作品にも視野を広げれば、論者の主張はいっそう説得力を増すことであろう。論者が将来、さらにスケールの大きな研究を完成させることが期待される。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2020年1月31日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。